琉球大学学術リポジトリ

小学校「家庭科」における児童の実践実態と教師の手立て：空間軸（学校・家庭・地域）と時間軸（現在・未来）を視野に入れて

メタデータ	言語:
	出版者: 琉球大学教育学部
	公開日: 2015-11-02
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 浅井, 玲子, 嘉手苅, 知亜紀, 仲真次, 愛美野, 下里, 樹里, 国仲, 夏美, Asai, Reiko, Kadekaru, Chiaki, Nakamashi, Amino, Shimozato, Jyuri, Kuninaka, Natumi
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/32255

小学校「家庭科」における児童の実践実態と教師の手立て
- 空間軸(学校・家庭・地域)と時間軸(現在・未来)を視野に入れて -

Child's practice in an elementary school "home Economics" and teacher's class way : Based on a spatial spindle (school, house and area) and a time axis (present and the future).

浅井玲子・嘉手苅知亜紀・仲真次愛美野・下里樹里・国仲夏美

Reiko ASAI* Chiaki KADEKARU* Amino NAKAMASHI*
Jyuri SHIMOZATO** Natumi KUNINAKA**

＊琉球大学教育学部
** 琉球大学教育学部附属小学校

Ⅰ　緒言

世界標準の学力論 PISA (Program for International Student Assessment 2003) や DeSeCo (Definition & Selection of Competencies; Theoretical & Conceptual Foundations 1997) の影響を色濃く受け，国立教育政策研究所『社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程の基礎原理』(2013) は次期学習指導要領の改訂にむけて 21 世紀型能力について言及した。

21 世紀型能力の提案では，中核に一人ひとりが自ら学び判断し自分の考えをもって他者と話し合い，考えを比較吟味して統合し，よりよい解や新しい知識を創り出しさらに次の問いを見つける力として「思考力」を位置づけた。その思考力を支えるのが「基礎力」，すなわち「言語，数，情報（ICT）を目的に応じて道具として使いこなすスキル」としている。最も外側には思考力の使い方を方向付ける「実践力」を位置付けている。「実践力」とは，「日常生活や社会，環境の中に問題を見つけ出し，自分の知識を総動員して，自分やコミュニティ，社会にとって価値のある解を導くことができる力，さらに解を社会に発信し協調的に吟味することを通して他者や社会の重要性を感得できる力」のことであり，更にその関連を，「基礎力を基盤として身に付けた思考力は，実生活や社会における問題解決において具体的な実践として発揮されることになる。実生活における問題解決において，人は，自らが置かれた周りの世界と様々に関わりながら，自己の信念や価値観を吟味し，具体的な行為を選択し，その行為の結果を振り返って評価する。知識と思考力を実生活・実社会で活用し，いかに行為すべきかを決定し，実際に問題を解決していくための力が実践力である。」と述べている。

これまでも，PISA 型学力で示された「知識や技能を実際生活のさまざまな場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価」(問題解決能力) や全国学力調査で示された「知識・技能等を実生活のさまざまな場面に活用する能力やさまざまな課題解決のための構想を立て，実践し評価・改善するなどに関わる内容」の活用型学力で重視されている事は，小学校５年生から学ぶ「家庭科」教育も従来から行ってきたことである。

これらのことは，現行の学習指導要領の教科の目標によっても確認できる。小学校は「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して，日常生活に必要な基礎的・基本的な知識及び技能を身につけるとともに，家庭生活を大切にする心情をはぐくみ，家族の一員として生活をより良くしようとする実践的な態度を育てる」，中学校は「衣食住などに関する実践的・体験的な活動を通して，生活の自立に必要な基礎的・基本的な知識及び技術を習得するとともに，家庭の機能について理解を深め，これからの生活を展望して，課題をもって生活をより良くしていこうとする実践的な態度

を育てる」，高等学校は「人間の生涯にわたる発達と生活の営みを総合的にとらえ，家族・家庭の意義，家族・家庭と社会のかかわりについて理解させるとともに，生活に必要な知識と技術を習得させ，男女が協力して主体的に家庭や地域の生活を創造する能力と実践的な態度を育てる」と示されているのである。このように並べてみると，生活問題の改善・解決に主体的・実践的に取り組む事を教科の目標としてきた家庭科は，ひとの生涯を通して身につける必要のある能力を育てるための学習内容・方法を包括的に含む教科であるといえよう。

さて，生活実践における家庭科の先行研究において，鳥羽・久保(2013)は，小学校の家事参加（家庭での実践）に影響する要因として「性別」「家事に対する態度」「消極的態度」「自立の働きかけ」「自己の成長の認識」「家族の働きかけ」「塾や習い事の日数」の7つの要因の影響を確認している。しかし，家庭科未履修の小学校4年生も分析対象としたため家庭科学習の影響についてはモデルに組み入れていない。よって教師の授業中の手立てについては言及されていないし，授業実践については「消極的な気持ち」の克服のみを取り上げた実践（鳥羽2014）となっている。

安慶名・浅井（2013）は沖縄の小学校5・6年生の生活技能習得現状とその理由について検討した。「興味・関心因子」「食生活因子」「生活環境因子」「衣生活因子」を取り出し，児童自身の習得理由と技能習得得点の関連を検討した。「興味・関心因子」「生活環境因子」は6年生に比較して5年生の方が高く，父親の家事参加は有意に「興味・関心因子」「生活環境因子」得点を高めている事，習得理由はその如何によらず理由得点の高い者は技能習得得点も高くなるという結果であった。また，浅井（2014）は沖縄の小・中学生の生活技能定着の現状と課題について「好意・意欲因子」「食生活技術因子」「衣生活技術因子」「生活環境因子」「食生活知識因子」を取り出し，家庭科履修学年に調査を行い，学年が上がると必ずしも因子得点が高くなるとは言えない事や，できるようになりたい理由にも学年で有意に差がみられる事，父親の家事参加の影響を明らかにしたが，教師の手立てとの関連は言及できなかった。

沖縄県の小学校における，家庭科で学んだ事の児童の学校や家庭における実践実態，将来の実践可能性と教師の手立て等の関連を検討・分析した詳細なデータはまだない。授業において，どのような教師の手立てがその児童生徒の実践力に影響するのかを明らかにし，現在の手立てをはじめとする取り組みの効果を確認することは重要な課題である。

授業には統制できない変数も非常に多く，更には教師の手立てはその題材により異なる。それでも尚，充実した授業や生活実践に繋げるためには，実践に有効な教師の一般的あるいは教科の特性に基づいた有効な手立てを丁寧に探っていく事が求められる。本稿は小学校「家庭科」の児童の学びと教師の授業におけるより良い手立てのための基礎的な研究と位置づけ，空間軸（学校・家庭・地域）と時間軸（現在・未来）を視野に入れて小学校5年生で学んだことを小学校5・6年生は学校や家庭や地域でどの程度実践しているか，あるいは将来は実践したいと思っているかについてアンケート調査を基に明らかにする。更にこれまで教師が行ってきた手立てが，家庭科の実践力と繋がってきたか確認する機会としたい。

II　研究方法及び分析方法

1　研究方法，対象者および調査期間

沖縄県内のR小学校5年生（男子56人・女子53人），6年生（男子51人・女子58人），合計220人に対して無記名自記式質問紙調査を実施した。

5年生の家庭科の学習が終了する3月に担当教員に依頼して配付，回収した。授業直後や終わりの会等に行ったため，回収率は100%であった。

2　調査内容

アンケートの調査項目は，①対象者の属性，②家庭科で学習した事の実践度，③実践と関わる対人的要因，④教師の授業における手立てである。

属性としては，学年・性別・父母の就労と家事参加・家庭科への興味関心について尋ねた。

実践尺度項目として，小学校5年生で学ぶ家庭科の内容を小学校家庭科の学習指導要領解説や教

科書，指導書を基に取り出し項目とした。更にそれらを時間軸としては，現在，将来を意識し，空間軸としては学校，家庭，地域を意識して作成した。具体的には，「家族のためにしている事がある」「家では手順よく料理を作っている」「食事は好き嫌いなく食べている」「栄養バランスを考えた食事をしている」「食事の後は片付けをしている」「衣服の着方を工夫している」「手ぬいをしたことがある」「ミシンを使った事がある」「快適な部屋作りをしている」「物を大切にしている」「お金は計画的に使うようにしている」「買い物をする時は表示などを見るようにしている」「家庭生活は環境とも関わっているので，工夫している事がある」「テレビなどの情報は本当かどうか調べるようにしている」「家庭科の学習でできるようになった事を家でも活かしている」の15項目の内容について，授業や学校・家庭・将来の45項目で尋ねた。

次に，実践に影響を及ぼす要因としては，まず，すべての教科の授業に共通する教師の手立てを検討した。具体的には，『現代授業大事典』(吉本監修，1987)を基に“授業展開のタクト”つまり授業の中での応答的指導に関わる教師の指導性，“説得(レトリック)”，“ゆさぶり”，“指さし”，“発問”，“説明”，“指示”，“助言”，“評価”，“板書”，“演示（示範）”，現在では机間指導と表記することが多い“机間巡視”，“ノート指導”を取り上げ，DeSeCoのキーコンピテンシーから“社会的に異質な集団での交流”“自律的に活動する事”“道具を相互作用的に活用すること”を取り上げた。家庭科に関連する事項として，学校家庭科の学習指導要領解説からは，実習・観察・調査・実験，実践的，問題解決的な学習，教師の感化，実生活（家族）と関連，日常生活への活用，充実感，達成感，共通と個別，良さや個性，生活の中で生きる言葉などのワードを抽出した。また，これまでの教育心理学研究など授業研究に関わる文献や研究資料，学校の研究紀要等から“自尊感情”，“自己肯定感”，“批判的思考”，“創造的思考力”，“意欲”，“積極性”，“仲間に関心”，“試行錯誤”，“螺旋的な学び”，“考え工夫し実践する”，“生涯にわたる実践”，“事前調査”，“体験的な学習”，“見通し”，“振り返り”，“ストーリー性のある授業”などのワードを取り出した。

これらを基に項目を検討し，アンケート項目としてはふさわしくない（答えにくい，あるいは他の方法や別稿とするべきと筆者らが判断）項目や回答者の負担，確保できる時間等物理的な面も考慮し，自己肯定感4項目，人とのつながり実感4項目，大人モデルの存在3項目，一般的な授業に関する教師の手立て6項目，家庭科に多く見られる手立て9項目の合計26項目を作成した。

すべてを合わせると，最終的なアンケート項目は79項目となった。

学年，性別，父母の就労と家事参加以外の項目は，「その通り」を6，「ほとんどその通り」を5，「半分その通り」を4，「少しちがう」を3，「ほとんどちがう」を2，「全くちがう」を1とし，1～6までの6段階から評定を求め得点とした。

Ⅲ　結果と考察

1　実践尺度の検討

実践度45項目を「授業や学校での実践（以下学校）」「家庭での実践（以下家庭）」「将来への気持ち（以下将来）」とし考察する。全体的に得点が高く，天井効果(平均＋1SD＞6)を示す項目も見られたが，対象が1校であり，家庭科を学ぶすべての児童を対象としたことから，得点の高い事も良い実態ととらえ，省かずに用いている。今後の分析は，「学校」・「家庭」・「将来」の項目の合計得点を項目数で除した値を合成得点として使用する。実践度尺度間の相関と平均，SD，α係数を表1に示す。

平均点で見ると実践度は　将来＞学校＞家庭となっている。小学生の段階では家庭での実践には制約も多いが，条件が整えば将来は実践したいという意欲は非常に高いと言えよう。ややもすると，習った事を即実践に繋げることを要求されがちだが，長い目で見た実践に繋げる学びを小学校でも培っている事が言える。

なお，前述の具体的項目で一番平均得点が高かったのは，「学校」の“栄養バランスは大切だとわかった”の5.69点，「家庭」の“お金は計画的に使うようにしている”の5.37点，「将来」の“将来，お金は計画的に使っていきたいと思う　”の5.73点であった。低かったのは

表1　実践尺度間の相関と平均、SD, α係数

	学校	家庭	将来	平均	SD	α
学校	-	.79 ***	.72 ***	5.40	.63	.91
家庭		-	.68 ***	5.02	.83	.90
将来			-	5.50	.66	.91

*** p< .001

「学校」の“家庭科の学習で習った事を学校生活でいかしている”平均得点4.87点,「家庭」の“テレビなどの情報は本当か調べるようにしている”平均得点　4.35点,「将来」の“将来手縫いで何かを作ってみたいと思う”平均得点4.98点であった。

2　属性による差の検討

(1)　学年による差

「学校」「家庭」「将来」の何れも平均得点は6年生が高かったが,「学校」(t(212)=1.23, n.s.「家庭」(t(210)=0.31,　n.s.),「将来」(t(210)=1.53,　n.s.), で有意では無かった。

(2) 男女差

「学校」(t(196.41)=3.00, p<.01),「家庭」(t(193.67)=1.99, p<.05),「将来」の(t(172.32)=4.20, p<.001)となり，すべての項目で女子は男子より高い得点を示した。「家庭」での実践の差が一番小さく，「将来」の差が一番大きい事は，女子は小学生としての現在よりも将来の家庭における役割期待を大きく感じているのであろうか。家庭よりも学校での差の方が大きい理由については，今回は明らかにはできなかった。家庭科を学び始める時点で男女差が見られることはいくつかの研究も指摘してきたが，それが将来にわたって続いている可能性があり，最初の一歩を指導する立場としてはそのことを再認識する必要があり，他教科に増して児童の実態把握が必要となる。

(3) 父母の就労と家事参加

家事参加をしている父親は220人中138人(62.7%)と過半数を超えていた。母親の就労も220人中163人(74.1%)を占めていた。父母の就労，家事参加の差と実践度の関連を見ると，父親の家事参加のみが,「学校」(t(10.62)=3.66, p<.001),「家庭」(t(14.48)=4.44, p<.001),「将来」(t(28.27)=3.72, p<.001)で有意な差を示した。これまでの調査においても同様の結果が出ており，父親の家事参加を促す事は児童の実践度を上げることにもつながる可能性がある。

(4)　家庭科得意度

家庭科に興味があるか，得意かどうか(α=.78)を尋ねたところ平均得点は4.55点となった。平均値より高い児童103人と平均値より低い児童111人に分け，実践度を比較したところ,「学校」(t(42.50)=7.58, p<.001),「家庭」(t(30.54)=8.50, p<.001),「将来」(t(44.24)=7.16, p<.001)で，興味があり，得意と考えている方が実践度も高かった。

(5) 自己肯定感

自己肯定感は「私には良いところがいくつかある」「私は今の自分に満足している」「私は頑張れば大体の事はできると思う」「私は自分の意見を自信を持って言う事ができる」の項目(α=.78)で測定し，平均得点は4.17点であり，他の調査項目と比較すると高くはなかった。平均値より高い児童119人と平均値より低い児童96人に分け，実践度を

比較したところ,「学校」(t(36.54)=4.94, p<.001),「家庭」(t(16.75)=5.55, p<.001),「将来」(t(34.96)=3.82, p<.001)で,自己肯定感と家庭科の実践度には有意な関連が見られた。

(6) 人とのつながり

人とのつながりは,「私は人の立場になって考えるようにしている」「私は友達の関係の中で,いろいろ成長したい」「自分とは違う家の事を聞くのは知識が得られるので,おもしろい」「私は人のために何かしてあげることが好きだ」の項目(α =.75)で測定した。平均得点は4.75点であった。平均値より高い児童136人と平均値より低い児童 77人に分け,実践度を比較したところ,「学校」(t(24.96)=7.26, p<.001),「家庭」(t(9.06)=6.16, p<.001),「将来」(t(30.95)=4.72, p<.001)で,人とのつながり認識と家庭科の実践度には有意な関連が見られた。

(7) 大人モデルの存在

「私はこんな人になりたいと思う理想がある」「私はこんな大人になりたいと思う人がまわりにいる」「私は先生のようになりたいと思う事がある」の項目(α =.61)で測定した。平均得点は4.58点であった。平均値より高い児童119人と平均値より低い児童94人に分け,実践度を比較したところ,「学校」(t(33.00)=77.21, p<.001),「家庭」(t(15.82)=6.81, p<.001),「将来」(t(37.12)=6.03, p<.001)で,大人モデルの存在と家庭科の実践度には有意な関連がみられた。

3 児童が感じた教師の手だてによる差の検討

一般的な教師の手立てと家庭科に多い授業の手立てに分け,項目ごとの平均得点を表2に示す。ここでも天井効果を示す項目についても省かずに示した。フロア効果(平均－1SD＜1)を示す項目は無かった。平均点を分岐点として,実践度との関連を見たところ,すべての項目で有意な関連が見られた。これまで行われてきた授業における教師の手立てはすべて,実践力を高める結果と関連している事が確認できた。児童が認識している手立てのうち,他と比較して低かったのが「(家庭科の)授業では自由に意見が述べられる」「(家庭科の)授業では自分の家族や家庭のことを話す機会がある」「(家庭科の)授業の実習や実験をして驚いたことがある」であった。

教師の手立て得点が高い児童ほど実践度も高かった。同じ教員が指導しても,その手立てに気づくかは児童個々の感性による部分もある。やり方(方法)を知るだけではなく,知り方を知るメタ認知能力も家庭科の実践に繋がる学びとなる可能性が示唆された。

Ⅳ まとめと今後の課題

R小学校における家庭科で学んだことを学校や家庭で実践しているか,将来実践したいと思うかを,父母の就労と家事参加,自己肯定感,人とのつながり認識,教師の家庭科の授業での手立て等との関連についてアンケート調査を基にまとめた。

全体的な傾向として,平均得点が高く,R小学校における家庭科の実践度や授業の手立ては,非常に高く評価できた。しかし,より多くの児童が高みをめざすのが教育である。そこで集団における比較のために高低の群分けをし,今後の授業作りのための参考としていきたい。

1 実践度の平均得点は,将来＞学校＞家庭となった。小学生の段階では家庭での実践には制約も多いが,条件が整えば将来は実践したいという意欲の表れだと思われる。ややもすると,習った事を即実践に繋げることを要求されがちだが,長い目で見た実践に繋げる学びや意欲を小学校でも培っている事が言える。

2 実践の実態として,高得点だったのは学校での「栄養バランスは大切だとわかった」家庭での「お金は計画的に使うようにしている」,将来の「将来,お金は計画的に使っていきたいと

表2 児童による教師の授業手立て認識と実践度の関連

手立て／実践度	わかりやすく説明 平均(4.80) 高 N=146	低 N=68	自由に意見 平均(4.30) 高 N=110	低 N=104	わかりやすく板書 平均(5.01) 高 N=97	低 N=107	実際にやって見せる 平均(5.24) 高 N=124	低 N=90	見回ってアドバイス 平均(5.33) 高 N=140	低 N=74
学校 平均	5.58	5.00	5.60	5.16	5.68	5.17	5.63	5.08	5.57	5.06
SD	.48	.74	.41	.73	.38	.70	.46	.70	.50	.72
t値	5.91 ***		5.68 ***		6.76 ***		6.50 ***		5.46 ***	
家庭 平均	5.23	4.56	5.26	4.76	5.30	4.78	5.25	4.71	5.20	4.69
SD	.70	.90	.70	.88	.68	.87	.75	.83	.77	.83
t値	5.35 ***		4.60 ***		4.92 ***		4.85 ***		4.40 ***	
将来 平均	5.66	5.14	5.62	5.37	5.77	5.27	5.67	5.24	5.61	5.27
SD	.48	.82	.47	.79	.44	.72	.51	.75	.62	.67
t値	4.81 ***		2.81 **		6.18 ***		4.67 ***		3.77 ***	

	ノートにコメント 平均(5.19) 高 N=123	低 N=93	家族や家庭を話す 平均(4.43) 高 N=120	低 N=94	グループ活動 平均(4.83) 高 N=129	低 N=84	家でやるとほめられる 平均(4.72) 高 N=136	低 N=78	家の人とやる宿題 平均(4.77) 高 N=136	低 N=75
学校 平均	5.53	5.22	5.61	5.13	5.60	5.08	5.59	5.06	5.57	5.11
SD	.53	.71	.46	.72	.49	.71	.46	.74	.48	.73
t値	3.54 ***		5.70 ***		5.92 ***		5.71 ***		4.83 ***	
家庭 平均	5.22	4.75	5.27	4.68	5.24	4.66	5.26	4.61	5.20	4.74
SD	.70	.91	.72	.84	.71	.89	.70	.88	.75	.82
t値	4.14 ***		5.41 ***		5.00 ***		5.61 ***		4.05 ***	
将来 平均	5.60	5.37	5.65	5.30	5.66	5.23	5.66	5.21	5.64	5.28
SD	.54	.76	.52	.75	.45	.83	.50	.79	.50	.72
t値	2.44 *		3.85 ***		4.30 ***		4.45 ***		3.88 ***	

	実験実習で驚く 平均(4.49) 高 N=127	低 N=86	生活の場で活かせる 平均(5.33) 高 N=138	低 N=76	実験実習が多い 平均(4.90) 高 N=146	低 N=69	生活を見直す 平均(5.17) 高 N=113	低 N=102	繰り返しやってみる 平均(4.65) 高 N=124	低 N=90
学校 平均	5.58	5.15	5.64	4.94	5.62	4.92	5.69	5.08	5.66	5.04
SD	.52	.68	.38	.75	.44	.71	.40	.69	.41	.71
t値	4.91 ***		7.50 ***		7.54 ***		7.80 ***		7.44 ***	
家庭 平均	5.28	4.67	5.29	4.51	5.28	4.43	5.32	4.67	5.35	4.55
SD	.70	.80	.64	.90	.64	.89	.70	.83	.66	.81
t値	5.68 ***		6.57 ***		6.97 ***		6.10 ***		7.70 ***	
将来 平均	5.65	5.31	5.69	5.15	5.68	5.09	5.70	5.26	5.71	5.20
SD	.52	.78	.44	.82	.43	.85	.41	.79	.41	.80
t値	4.00 ***		5.27 ***		5.41 ***		5.04 ***		5.48 ***	

* p< .05　　** p< .01　　*** p< .001

思う」の項目であった。これらは，児童の興味・関心のある項目としても読み替えることができ，授業の導入などで活用できる項目とも言えよう。

低かったのは，学校では「家庭科の学習で習った事を学校生活でいかしている」であった。家庭科は家庭生活をフィールドとしているために家庭での実践が注視されがちだが，多くの生活時間を学校で過ごす児童にとって，学んだことを次の授業や学校生活の中で実践に繋げることは重要な課題であり，児童に対して教師が意識付けを行う事が必要となろう。家庭で低かったのは「テレビなどの情報は本当かどうか調べるようにしている」であった。現代の児童の生活には情報があふれている。その情報自体を「本当にそうだろうか」と疑ってみるような場面や，情報は間違ってはいなくても，生活の場で統合すると矛盾が生じる事も多い。そのような経験を授業に取り入れることがこれまでにも増して必要であろう。将来で低かったのは，「将来手縫いで何かを作ってみたいと思う」であった。手縫いは，将来にわたって必要とされる実践技能であると考える。家庭生活を豊かにするだけでなく，手指の巧緻性を育む上でも重要である。手指の巧緻性が低くなったと言われる現代こそ，楽しく取り組め，また将来何か作ってみたいと思わせる教材の開発が，児童の発達の上でも望まれる。

3　実践度を高め，差が見られた個人特性は，男女差，父親の家事参加，自己肯定感，人とのつながり認識，大人モデルの存在であった。

男女差については家庭科を学び始める５年生の時点で差が見られる。家庭生活について，教科として最初の一歩を指導する立場としてはそのことを再認識する必要があり，他教科に増して児童の実態把握が必要となる。

父親の家事参加については，学級PTAやおたよりなどの機会をとらえて，家庭へ伝えていく必要がある。高等学校の男女必修が始まった世代が父親になってくるに従ってその参加数も増えてきているように感じている。父親の家事参加は現代の大きな課題である少子化や，母親の育児不安の解消にもつながるとの指摘もあり，更には子どもの実践度にも繋がるのである。

これまでもＲ小学校が課題としてきたように，自己肯定感，人とのつながり認識は他の項目得点と比較すると高くはない。生徒指導機能を生かす授業や協同的学びによる授業を推進していく必要がある。

大人モデルの存在については，大人モデルとしての教師の存在も含めて，これらを高めるような授業の開発と，どのような授業内容や方法がそれらを高めるのか，内容と方法について考えていく必要がある。

4　これまで行われてきた授業における教師の手立てはすべて，実践力を高める結果と関連している事が確認できた。児童が認識している手立てのうち，他と比較して低かったのが「(家庭科の)授業では自由に意見が述べられる」「(家庭科の)授業では自分の家族や家庭のことを話す機会がある」「(家庭科の) 授業の実習や実験をして驚いたことがある」であった。前の２項目については学級経営に関わる部分もあり一概には解決できないが，家庭科にとっては非常に重要な手立てとも考えている。また，「(家庭科の) 授業の実習や実験をして驚いたことがある」については，驚きと不思議を通した人間と生活世界の発見を興味・関心につながるものとして必要と考えている。知っているつもりの生活を本質的には知らないと気づかせることも学びに繋がる重要なファクターだと思うからである。より良い教材開発が課題となる。

また、教師の手立て得点が高い児童ほど実践度も有意に高かった。同じ教員が指導しても，その手立てに気づくかどうかは児童個々に任される部分がある。授業の内容だけではなく，方法を含め，俯瞰的に授業を意識させる試みも必要であろう。やり方（方法）を知るだけではなく，知り方を知るメタ認知能力も家庭科の実践に繋がる学びとなる可能性が示唆された。今後の実践において検証していく課題となる。

これまで，アンケートをもとに述べてきたが，1校を対象とした事，対象とする学校の児童の授業に対する意欲や指導する先生方の熱心さの表れだと考察するが，得点が非常に高かった事等があり，この結果が沖縄の小学校に一般化できるかど

うかは，疑問が残った。今後複数の小学校を対象として調査データを収集し，分析する事が課題である。

また，アンケート作成の段階で，地域をあまり前面に打ち出すような質問項目の作成はできなかった。しかし，家庭での生活はそれ自体が地域生活ともいえるのではないか等の意見もあり，生活に関連する調査の場合の調査項目としての切り取り方の難しさを再認識した。更に，家庭科において混同されがちな実用性と実践力については，再考の必要があり，今後の課題としたい。

授業には統制できない要因も多く，小学校の場合他教科との関連も重要な要素となる。今後も丁寧に児童の実態や学習経験やその効果を検証していく事で，限られた時間の中でのより良い効果的な授業について検討していきたい。

参考・引用文献

安慶名奈々・浅井玲子 (2013). 沖縄の小学生の生活技能習現状とその理由 - 小学校5・6年生を対象に -. 日本教科教育学会誌　第35巻第4号 . pp.51 ～ 59

浅井玲子（2014）. 沖縄の小・中学生の生活技能定着の現状と課題，琉球大学教育学部紀要 . 第84集 .

荒井紀子 (2014).「学力論」と家庭科教育ー世界標準の学力論から見える家庭科教育の可能性と課題ー.　日本家政学会誌　Vol.65　No.1　pp.37 ～ 44

勝野頼彦研究代表 (2013)　教育課程の編成に関する基礎的研究報告書5　社会の変化に対応する資質や能力を育成する教育課程編成の基本原理（改訂版），国立教育政策研究所

田部井恵美子 (2001) . 家庭生活における意思決定能力の育成 . 日本学術会議教科教育学研究連絡委員会編集 . 新しい『学びの様式』と教科の役割 . 東洋館出版社

鳥羽波峰・久保桂子 (2013). 小学生の家事参加に影響する要因と家事参加を促進する家庭科の授業 . 日本家庭科教育学会誌 . 第55巻第4号 . pp.227 ～ 236

鳥羽波峰・久保桂子 (2014). 授業実践の広場　家事参加を促進する家庭科の授業 -「食事作り作戦」の家庭科の授業を中心に- . 日本家庭科教育学会誌 . 第57巻第1号 . pp.46 ～ 51

文部科学省 (2008). 小学校学習指導要領解説　家庭編 . 東洋館出版

文部科学省 (2008). 中学校学習指導要領解説　技術・家庭編 . 教育図書

文部科学省 (2010). 高等学校学習指導要領解説　家庭編 . 開隆堂

文部科学省国際懇談会事務局 (2002). 国際教育協力懇談会資料集 (資料 16). 我が国の教育経験について : 家庭科教育

山本紀久子（1985）. 実践力を育てる家庭科の授業 . 図書文化

吉本均責任編集 (1987).　3 授業行為の技術 .　現代授業研究大事典 . 明治図書出版 . pp.491 ～ 508